

はじめに

大学の教育と研究の水準を常に向上させるように努めることは、われわれ教職員にとって最大の責務であり、この教育・研究の質的向上が、とりもなおさず大学の発展と社会的貢献にそのまま直接寄与するものであることはいうまでもない。18 歳人口の減少により大学の冬の時代といわれる今日、中でも薬系大学における教育問題は、薬学部の 6 年制移行により、大きな転換期を迎えている。このように、大学一般として、さらに 6 年制薬学部に移行した薬系大学として、より一層の充実、発展を求める社会的な強い要請に応えるためには、大学の教育・研究の水準を高め、大学の管理・運営への並々ならぬ努力の必要なことはもちろんであるが、時代の流れに沿ったカリキュラムの改訂、CBT や OSCE の導入、実務実習モデル・コアカリキュラムに沿った 5 ヶ月間の病院薬局や薬局への実務実習の実施、教員組織や教育方法の改善、施設・設備の拡充など多くの重要な問題を解決して行かなければならない。

本学では、昭和 57 年以来、教員の研究活動を促進するため「京都薬科大学研究業績録」を毎年刊行しており、平成 4 年 8 月には、教学自己点検・評価運営委員会を発足させ、「教育・研究の現状と課題 平成 5 年(1993)」を公刊した。その後、引き続き年次報告として「同 平成 6 年(1994)」および「同 平成 7 年(1995)」のまとめを行った。平成 8 年度は、大学基準協会により新たに設けられた大学基準を念頭に、「同 平成 8 年(1996)」および「大学基礎データ調査」を大学評価マニュアル(大学基準協会、1995)の様式に準じた形でとりまとめた。さらに大学基準協会の相互評価を受けるために平成 10 年度を基準とする過去 5 年間の大学の点検・評価を総合的に行い、「京都薬科大学の現状と課題(平成 5 年 5 月～平成 10 年 5 月)―大学基準協会第 1 回「相互評価」報告―」を公刊した。また、平成 13 年 8 月には薬学の専門家 3 人による外部評価を受けるために自己点検作業を再開し、評価結果を「京都薬科大学の現状と課題―外部評価報告書 平成 14 年 10 月」として刊行し、外部に公表した。

今回は、大学基準協会の 2 回目の相互評価を仰ぐ決意をし、平成 19 年 4 月に学長の下で 9 分科会、ワーキンググループおよび審査会を中心とする組織体制を作り、総合的に大学の点検・評価を行い、「京都薬科大学 自己点検・評価報告書」をまとめ公にすることとした。自己点検・自己評価はその評価結果がフィードバックされることによってはじめてその役割を果たすことになるわけで、この報告が本学の薬学 6 年制の教育・研究のより一層の充実と発展に寄与することを切に期待するものである。

平成 20 年 3 月

学長 西野 武志